

伊豆西海岸でのトコブシの斃死とカレニア・ミキモトイ

2022年夏季に伊豆西海岸でトコブシの斃死現象が発生しました。また、関係は不明ながら、同時期にカレニア・ミキモトイ *Karenia mikimotoi* の分布が確認されたので、記録に残しておきたいと思います。

最初の連絡は7月15日に伊豆漁協土肥出張所長から、以下のようにありました。「土肥地区小下田(図)の天草操業時にトコブシが斃死しているのを漁業者が多数見ている。ひっくり返っているか、天草の上で弱っている。小下田の全域で見られる。生きているトコブシがいるかは貝取りが行われていないので不明。天草はある(餌はある)。赤潮は発生していない。貝取りは16~18日の連休中に口開けの予定。」

この連絡を受けて、当场から貝の口開け時の状況連絡を要望し、「7月16日に口開け。その後は操業していない。口開け時には斃死は目立たなく、問題とならなかった。」という報告を所長から受けました。

7月21日には小下田港で栄養塩分析のため採水した際(この時は潮は澄んでいた)に、操業を終えた海女さん4名からトコブシの斃死について聞き取りを行いました。「今日のトコブシは異常なかった。7月15日の斃死でかなり少なくなったのでは?今日は貝の操業だったが、トコブシが少ないために天草を一スカリ程度採った。ウニが死んでいるところ(棘が抜けている)があるが、7月15日の斃死ではないか?7月15日の海は“みずしお”(浅いところの表層は淡水化している状態)だった。」

さらに、7月27日には仁科地区(図)でもトコブシの斃死が発生しているという情報が入り、伊豆漁協仁科地区理事塩徳丸から聞き取りを行いました。「仁科でトコブシが死んでいる。死貝が散乱している、あるいは生きている貝を採っても家に着く時には白くなって死んでいる。」とのことでした。これによって、トコブシの斃死は土肥地区小下田だけの限定された現象ではなく、伊豆西海岸の広範囲に及ぶ現象だったことがわかりました。

毎年7月下旬に長期漁海況予報会議が開催されており、その場で様々な情報交換が行われます。今年は7月26~27日に開催され、7月上旬以降、伊勢湾内から湾口部(図)にカレニア・ミキモトイの赤潮が発生中との情報がありました。カレニア・ミキモトイ(写真)は渦鞭毛藻の仲間で、赤潮を形成し、魚貝類の大量斃死を起こすことで知られています。実際、カレニア・ミキモトイの赤潮が発生していた三重県志摩半島ではアワビなどの磯根資源や定置網に入網した魚が斃死し、問題となっ

¹気象庁アメダスによる土肥での降水量は7月10日:2mm、11日:0mm、12日:3.5mm、13日:0mm、14日:1mm、15日23.5mmであり、淡水の原因は当日の降雨の可能性が高い。

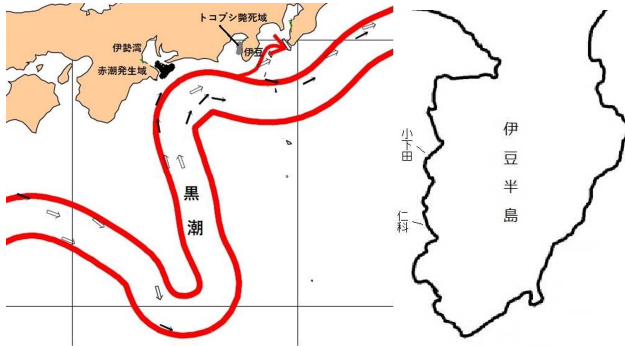


図 トコブシ斃死域と伊勢湾、黒潮の位置関係(海洋速報 7月15日を改変)

ていることがマスコミ報道されていました。

そこで、黒潮が大蛇行し、熊野灘から遠州灘に流れていた(図)ので、志摩半島～伊勢湾口部のカレニア・ミキモトイが黒潮によって運ばれてきて、伊豆西海岸でも赤潮状態になったのではないかと想定し、採水して検鏡しました。7月28日に仁科地区の仁科港と浮島海岸で採水し(この時も潮は澄んでいた)、早速検鏡したところ、カレニア・ミキモトイが観察されました(写真)。但し、密度は仁科港では3.4cells/ml、浮島海岸では2.9cells/mlであり、カレニア・ミキモトイの赤潮状態の密度4,000～5,000cells/mlとはほど遠い密度でした。仁科塩徳丸からは「日は不明だが、クロっぼい潮の日があった」との聞き取りも得ており、斃死が起きた時には高かったのかもしれません(土肥の聞き取りと一致しませんが)。今回、トコブシのへい死とカレニア・ミキモトイの因果関係はわかりませんが、いずれにしても伊豆半島沿岸でカレニア・ミキモトイが確認されたのは珍しいことです。



写真 7月28日仁科地区で確認されたカレニア・ミキモトイ

この結果(カレニア・ミキモトイが確認されたので、トコブシ斃死時には赤潮状態だったかもしれない)を関係者に連絡しました。加えて、カレニア・ミキモトイの赤潮が原因だとしても有効な対処法はないため自然消滅を待つしかないこと、新たな斃死があれば、斃死貝のサンプリングに行くことも伝えましたが、その後新たな斃死は起こらなかったようです。

(長谷川雅俊)